

## 立正安国論

### 一

「おうい水を一杯くれないか」

鎌倉の村岡の街道で、一人の侍が、家とは名のみ、ぶっこわれかかった農家の入り口に声をかけた。

正嘉二年の大地震後、余震が毎日のように続くので、家は修繕してもしようとなないと、人々をあきらめさせてしまったとみえて、鎌倉の街中にもこわれかかった家は処々方々にあつた。況わんや街はずれの農家などはまともに建っている家の方が珍しい程度である。

侍は声をかけても、返事がないので、一段と大きな声でど鳴った。

「おういつ、誰もおらんのか、水が一杯所望というのだ」

「……………」

相変わらず返事がない。

「おらんのだなあ、誰も、おらんければ仕方がないなあ」

侍は独りごとをいいながら、農家の裏手に廻った。谷の多い鎌倉では大抵の農家の裏手には綺麗なかけひの水があるのが普通である。

「おやつ」

侍は驚いたような声をした。

かけひはある。だが水が一滴も流れておらない。かけひや水桶につく青苔が、どす黒くひからびて、ぼろぼろになり、これが呑み水をためて置く水桶かと疑う程の、あわれな残骸であった。

「打ち続く地震のために、水脈が変って、水が出なくなつたとみえる。水が出んようでは、棲む人もこの家にはおらんのだろう」

余程喉がかわいているとみえて、侍は失望した顔をしながら、足を早めて農家の入口まできたが、空き屋になつた家に、二度までも声をかけた、自分の用心の悪さを苦笑しておる様子であった。

「拙者の勘は、そんなににぶくなつたのかなあ、空き屋に案内の声をかける程に……信じられんことだ……」

素晴らしいながら、家の中へはいり込んだ。

甕瓦破ぶれて霧不断の香を焚くという形容があるが、そんな風流とはおよそ縁遠い光景である。

破れた屋根からは、外の陽が方々に直射して家の中は明暗の縞模様が入り乱れている。侍は茫然として暫くつったつた。

一つの直射光を浴びて、五十歳位の百姓が壁によりかかって、うつろな眼を開いている。出山の釈迦という有名な絵があるがまさしくあの形相である。

顔の中にあるものは、にぶい光を放つ両の眼だけで、鼻も口もなくなつたといつてもよい。申し訳にまとつた着物の下は、骨と皮だけであることが恰好で知れる。生きるということは食うことなのだ。どんなえらそうなことをいつたつて食わなければ死んでしまう。偉いと他人からいわれる人間は、必ずうまいものを沢山食っている。世の中の下積みになつて毎日毎日あくせくと働かなければならない者が、まずい物さえ腹一杯食えないでいる。これが人の世の生きるということの約束なのであるか。そして飢饉は直接に食い物をつくつておる百姓に一番早くやつて来るという矛盾が世の中にあるのだ。働かない者には、直接生産にたずさわつておらない者には飢餓が一番おそくやつてくる。何時の世とても同じといえよう。

「どうしたつ……」

侍は慈愛の言葉をかけた。

「……………」

返事がない。百姓は口とおぼしきあたりから何かを、おびただしく喝つと吐いた。土だ、壁の土だ。なる程、百姓の膝許には沢山な壁土がおかれてあった。この百姓は食う物がなくて、部屋の壁土をくつているのだった。

「どうだ……」それを食べないか」

侍は腰の包みに手をやると、握り飯を手早く取り出し、百姓にみせた。

「めし………」

百姓は思ったより、大きな声でいった。まだどこかに生きる気力が残っているらしい。

「めし……めしが、まだあったのか」

百姓はいった。恨みをこめた声であった。壁土を皆んなが食べていると思っただのに、飯を食つてゐる奴が、まだ世の中におつたのかと憤つておるのであった。

「くれ、めしをくれ」

両の手を打ち震わして握り飯の方へ身体をすりよせようともがいている。

「お食べなさい」

侍は握り飯をもつたま、床の上に土足で上つていった。得て0知れない臭いが部中に漂つてゐる。

「おあがりっ」

と握り飯を差し出したが、百姓の拝むような両の手には、侍は握り飯をのせてはやらなかった。生き埋めにされたものが、急に陽の目をみると盲目になるといふ。長い間食わないでいる者に、米の飯を食わずと、一辺に死ぬという話を侍は知っていたのだろう。

「百姓、どうしたというのだ……何かいうことはないのか」

百姓の顔には死相が漂っているのを侍は見とつた。

「はいっ」

地獄の底から響いてくるといってもよい返事であつた。そして次のように、とぎれとぎれに仔細を語つた。

打ち続く飢饉のために食い物は全くなり糠にわらをまぜて食べておつたが、その糠もわらも遂になくなり、野山に草をさがす氣力もつきはてて、一家五人壁土を食うような仕末になつてしまつた。

妻はこの十日程前になくなつて、この筵の下にあるのがその死骸であるといふ。なる程膝許のこぼれた壁土の下に一枚の筵がある。筵の下に人間の死骸があるうとは思えぬ程。ぺしゃんこである。ひものように、からからになつて死んでしまつて、小さく縮んでしまつたのであろうか。

自分の弟の死骸も土間の隅にありますと力なく顎で示してみせた。余りのことに侍は思わず足

許に力が入って、床の板をふみしめた。ぼきんと割れるような音がしたが、この音に百姓の傍にあった古つづらの隅から、大きな鼠が五、六匹、きいきい啼きたてながら逃げ出していったのである。その古つづらは荒縄でしばられていた。

つづらの中は何かと問えば、百姓は自分の子供が入れてありますという。妻は二人の男の子に食べさせるために、自分が食わなかったので早く死んだ。妻がなくなると二人の男の子はひもじさにお母さんと呼び、食い物をくれと、母親の死んだことも知らずに、死骸に毎日とりすがって喚めいていたが、聽て余りの空腹にたえかねたとみえて、二人の子供はお互いに相手の手足を自分の口に入れて、血みどろになって噛み合うという始末であった。この二人の子供の畜生道さながらの行状に、たまりかね、一人は櫃の中へ、一人はこのつづらの中へ入れて荷縄をかけ早く死ぬことを願っておりましたが、どうやら、兩人とも死んだようでございますと語るのだった。

百姓はこれだけの話をやっと話すと、握り飯をくれという元気もなくなつて、がつくりと前へのめつてしまった。死んだのだ。

侍は百姓の前に握り飯を置いた。

南無妙法蓮華經

.....

「名越のお聖人さまにこの百姓の話をしよう、そしてこの苦しみはどこから来るかを聞こう。そして解決して貰うぞ」

侍は合掌を終えたと農家からとび出した。足は名越の聖人の草庵に向かっていた。

一一

「打ち続く天変地天、飢饉疫癘、今日もまたお聖人様のところに来る途中で、餓死してゆく親子をまのあたりにみて参りました。ああ堪えられないことです。お聖人様、この世の中はどうかってゆくのでしょうか。これを救うということは出来ないものなのでしょうか、お教え下さい……」

荏原義宗という若い武士が聖人の前に必至な顔をして問うのであった。

「今、この三界はわが有なり、その中の衆生は悉くわが子なり、と仏は法華経にいわれておる。天変地天飢饉疫癘も三界の中の出来事であり、餓死し、夭折する人々もまた仏の子である。どうしてこれを救い得ないことがあるのか。先ず仏の言葉を崇むべきであり、仏の言葉を信ずべきである」

聖人は厳然と答えて言葉を続ける。

「だが、仏の言葉といつても、仏の本当の言葉を崇めなければならぬ。仏が方便のためにいわれたような言葉を基としてはならんことは勿論である。法華經以外の諸經はその經文自身が明らかに示しておるが如く方便の教である。しかるに今の世の中はどうか、法華經以外の諸經を基として、この天変地天を退治しようとしておる。即ち弥陀の名号を唱えたり薬師如来を頼んだり、仁王經の講座を設ければ七難が七福となるぞと教えたり、或いは真言秘密の祈禱にのつとつて、五瓶の水をそそいだりするの類である。だがしかしこれ等は世の中を救済するどころか、益々世の中を混乱させておるようなものである。或る者は現世に仏の救済がないところから、後生などないものだ、未来などはないもんだと、却つて恨みをふくんで天を仰ぎ地に伏して悶絶するといった態である。

災難の因つて来たる原因を除けば災難はなくなる訳である。光明最勝王經には、正しい法があつても、その国に流布しないようならば四天は国を守らないとある。四天王の守護しない国には必ず、天変地天飢饉疫癘があるのは当然なことである。しかしこれ等の災難にもまして最も恐るべきことがこれから起るのだと覺悟せねばならんことがあるのだ。

それはなにかと言えば、薬師經の中の日月薄蝕之難、非時風雨之難、過時不雨之難等々の天変地天に属する五難は今眼前に起つておるが未だ起らざる二難がある。經文に示す五難がここ数年來、頻々として相連続して惹起しておるのであるから、必ずや残るところの二難が起り来たること



は理の当然である。而してその残る所の二難とは、外国がこの日国に攻めいつて来るといふ他国侵逼之難と、自国中に同志討ちが始まるという自界叛逆之難とである。

国が亡びるといふことは大事の中の大事であり、国を失い家を滅したならば何処に世を逃れようとするのか、すべからく仏者たるもの出家たるものはここに留意しなければならない。

天変の地天のと騒ぎたてて、眼前の事実を心を奪われ、この災難を退治しようとのみ心をくだいて、あらゆる祈禱をあらそつて諸宗の僧侶はいたしておるが、国家が滅亡しようという、この来たるべき未曾有の国難に対しては、まだ誰一人としてこれを憂い、これを論じたものがないのが現状である。

しかしここに誤つてはならぬ一事がある。それは、先ず国家を祈つて佛法を立つべしとのみいつて、国家の安泰を願ふことのみに力をいれすぎて、法の邪正を吟味するということを忘れてはならぬのである。国は法によつて栄えるのであるが、邪法によつて栄えるものではなく正法によつてのみ国は栄えるのである。今日本国の一切の寺塔の佛像等は形は仏に似ておるが、心は仏ではなく、九界の衆生、迷える凡夫の心そのものである。国費の無駄な消費であつて一向に祈とはならず、還つて變じて魔となり鬼となり、国主及び万民をわずらわすのである。これはひとえに邪法によつて国家を祈るが故である。

「人王八十一代をば安徳天皇と申す。父は高倉院の長子母は太政入道の女建礼門院なり、此の王

は元暦元年三月二十四日八歳にして海中に崩じ給いき、此の王は源頼朝將軍にせめられて海中の  
いろくずの食となり給う。人王八十二代は隱岐の法皇と申す。高倉院の第三の王子、文治元年御  
即位、八十三代には阿波の院、隱岐の法皇の長子建仁二年位につき給う、八十四代には佐渡の院  
隱岐の法皇の第二の王子、承久三年二月二十六日に王位につき給う、同じく七月に佐渡の島にう  
つされ給う」この承久の乱の事実が「日本国の王となる人は天照太神の御魂が入りかわらせ給う  
王なり」という立派な方々に起つたのである。

この事実から押して、大集経にある「隣国の為に侵入せられん」金光明経に言う「他方の怨賊  
国内を侵掠す」仁王経に示す「四方の賊来たりて国を侵す」という経文の事実がこの日本国に惹  
起してもけつして不思議ではないのである。日蓮がこれをいえば世を騒がすものと人々はい  
うが、経文の示すところなればいかんともしがたいのである」

### 三

「聖人！文章家をもつて任じ、文章家をもつて北条家に宮仕えするこの比企大学三郎が、このた  
びほど、己れの無力さをひしひしと感じたことはございません」

「それはどういう意味ですか、大学殿」

「……立正安国論の草稿を拝見させていただいて、感じたことです。京都時代の御交友の誼をもつて遠慮なく申し上げますが、先ず最初に無礼をお赦し下さい。実は、これは立正安国論の草稿で、執権職北条時頼殿へ献策いたすから、文章の悪いところを訂正してほしいと、過日拙宅をわざわざお尋ね下さって拙者に申されました時は、拙者も当代の文章家をもつて任ずる手前、聖人の前に先生のような気持でおりました。しかるに一読ただだ茫然自失の態です。大空に輝く日輪に向かつて誰が善意の批評をいたしましたでしょう。批評するものありとすれば、それは、個人の環境の相違個人の心柄の問題であつて、あく迄も日輪の批評にはなりません。世の中には批評を絶たか文章というものがありません。立正安国論がそれです。これは文章を通り越して魂そのものです。打ち続く天変地天に打ちひしがれた人々を何とかして救つてやりたいという仏の魂を紙につらねたものです。この文章こそ永遠に死ぬことのない文章です。立正安国論は文章の豪華壮麗さをもつて人を驚かすのを目的とする文章では勿論ありませんが、たくまらずしてそれになりきつておるといふことも見逃してはならないと思います。お聞き下さい。あの松籟の音を」

大学三郎は言葉をやめて、聖人と顔を見合わせた。開けはなされた座敷、一しきり松風の音が、二人の間をさおつと、かけぬけてゆく。文応元年の五月である。鎌倉の滑川を左におれると小さな谷がある。ここを比企谷という、このあたりは松の樹が多い。

「自然はたくまらずして一つの格調をもつております。松籟の音も、大洋の濤の音も、さては小河

のささやきも、一つの妙なるしらべを自らもっておりませぬ。偉大なる魂の文学はこれまた、たくまずして一つの雄大なる格調をもっておりませぬ。立正安国論の文章はそれに到達しておりませぬ。さて以上は文章上のことですが、それ以上に私を驚かしたのは勿論その内容です。立正安国論を拝読して私は始めて、七月八月の盛夏に雪のふつたという未曾有の出来事の原因がわかりました。鎌倉の海の水が変色しておびただしく死魚のあつた原因が、或は京都では灰がふつたということもあります。そのいわれがわかつたような気がいたします。天変地天は故なくして来た訳ではなく、飢饉疫病はよつて来たるべき原因があつたことをようやく立正安国論によつて了解いたしました。聖人、この上は一刻も早くこの立正安国論を北条時頼殿に献策いたすことです。これが、この立正安国論の文章を添作せよと忽体なくも聖人よりのまれました大学三郎がいろいろたつた一つの言葉です。学者というものはつまらないものだと言つておりました。たゞものを覚えておるだけです。記憶しておるだけです。そしてそれを粉飾して文字につらねておるのが文章家でしょうが、近年より近日に至るこの天変地天をただ紙の上に記録するだけで、その原因を究めようともせずにおりました。よつて来たる由縁を漠然とは考へてみたこともありません。一向他人に語つてきかず程のしつかりしたものには困んでおりませぬ。聖人、私を今後とも御指導下さいませ、立正安国論の草稿を先ず最初に拝読させてください。この比企大学三郎、まことに仏縁の深いことと感銘にたえないものがあります。今後とも信心を怠るものではあ

りません」

——この比企大学三郎は後年、大聖人の池上における葬儀の列中に大切な役割を担当しておることをみても、以上の言葉がむなしくなかつたことを証明しておる——

「いやいや過分なお言葉を賜わつて、恐縮いたしております。日蓮も早速にこの立正安国論を宿屋佐衛門尉光則殿を通じて北条時頼殿に献上いたす所存であります。その砌り殿中において朗読申し上げて下さる役目は、とりもなおさず貴公大学三郎殿です。その貴公にはこの日蓮、京都において遊学の砌りにいろいろと御指導を賜わつた不思議な仏縁、ただ有難く思っております」

「聖人、立正安国論を殿中において時頼殿の御前に朗読いたすのは勿論私の役目でございますが、往時を懐古すれば涙滂沱たるものがあります。父の比企能員は鎌倉二代將軍頼家公の恩寵を受けた若狭局の父として鎌倉幕府に時を得ておりましたが、北条時政によつて亡ぼされ、私は兵火の京都に逃がれて今日にいたつたものでございます。大学三郎は北条方にいわせれば、いわば謀叛人の子供であります。その謀叛人の子供が、聖人の立正安国論を殿中において朗読いたすでございます。感なきを得ないではありませんか。父は自分の孫一幡公をもつて將軍にしようとし、北条時政はその孫千幡公をもつて將軍にたてようとして、時利あらずして父は時政に亡ぼされたのでございます。父も正義と思ひ北条時政も自分を正義と思つておつたことでしよう。だが果していずれが正義であつたのでしょうか、そのようなどちでもよいような正義をもつて国

を治められたのでは人民こそたまりません。自分だけに都合のよい正義が横行する。これでは天も怒るでしょう。地も激怒する筈です。何をもつて人民を治むべきか。人の世の口にする正義などの外に正法というものが厳として存在することを知らなければなりません。正法に住してこそ国は安泰であると聖人の立正安国論は教えております。立正安国論に「汝早く信仰の寸心を改めて速かに実乗の一善に帰せよ。然らば則ち三界は仏国なり仏国それおとろえんや。十方は悉く宝土なり。宝土なんぞやぶれんや。国に衰微なく土に破壊なくんば身はこれ安全にして心はこれ禪定ならん。此のことば此のことば信ずべく崇むべし」とは、仏者たる聖人が天下国家のために北条時頼殿に進言せんとするところでありましょう。しかるに私の父比企能員が謀叛人の汚名をきて北条時政に殺されてより建仁三年から本年五十七年、父の敵たる時政の末孫北条時頼殿に、謀叛人の子といわれたこの大学三郎が、殿中において、時頼殿に眞の政治のありかたを示し、天下泰平国土安穩の秘術を説く聖人の立正安国論を朗読いたすのです。私は今こそ過去の怨讐のきずなをたちきつて聖人の心境に徹底し、この立正安国論という魂の文字を執権北条時頼殿の面前に朗読致す決心をいたしております。聖人一日も早くこの立正安国論を幕府に御進覧下さい。私大学三郎は故郷忘じがたくこの鎌倉に帰りきたつて父の墓近くのこの比企谷にすんで謀叛人の子孫たる汚名を甘受しながら、心淋しくも北条家に宮仕えいたしておりますが、立正安国論を殿中に朗読致す日こそ、亡父比企判官能員の霊が成仏する日であるとただ嬉し涙にくれるばかりで

「ごやいます」

大学三郎の感激の言葉は仲々つきない。

——比企大学三郎に対する一説を参考までにかかげる。大学三郎能本という。父は比企能員、父能員が罰せられた時はまだ幼少であつたので当時京都の東寺にあつた伯父にあたる伯耆の法師が三郎を出家せしめ、後に文士となり、順徳上皇に従つて佐渡にお伴申し上げていたが、頼経將軍の奥方が姻戚になるその関係から許されて後鎌倉に帰り幕府に仕えておつた。後には篤く聖人に帰依して本行院日学と名乗り、その邸宅を寺とした。これが現在の比企谷の妙本寺である

#### 四

文応元年七月十六日聖人は立正安国論をたずさえて、長谷の観音とは小山一つでへだたつておる宿屋衛左門尉光則の屋敷を訪うた。

宿屋左衛門尉は寺社の事務をつかさどる奉行であつたから、聖人の訪問となつたのである。

宿屋左衛門尉も小町の辻説法で有名な日蓮聖人のことは知っておつた。七年程前から小町の辻に南無妙法蓮華経という旗がたち南無妙法蓮華経という声が毎日のように続いた。石がとび瓦が

とぶことも毎日のようにつづいた。他人が耳を傾けようが傾けまいが、そんなことは、てんで気にしておらないように南無妙法蓮華經の声がつづいた。鎌倉の人達は仏様に向かえば南無阿弥陀仏としか唱えごとをしらなかつたのに、何時の間にか南無妙法蓮華經という唱えごともあるということを知つたのであつた。このようにして七年前から小町の辻に起つた、南無妙法蓮華經の聲が、三年前に急にきこえなくなつたのである。五年も続けば結構名物になつてしまふ。小町の辻の南無妙法蓮華經も鎌倉の大仏様なみに名物になつたのが、急にきこえなくなつたので、鎌倉の人達も、悪口はいつてもなんだか淋しいものを感じていた。

但し鎌倉中の僧侶達は胸をなでおろした。

念仏無間

禅天魔

真言亡国

律国賊

この叫びが鎌倉からきこえなくなつたからだ。何故聖人が小町の辻から見えなくなつたか鎌倉の人達は知らなかつた。おくそくする理由は教えきれない程あつた。実は聖人は正嘉二年、正元元年と二か年間駿州岩本の実相等に入蔵して立正安国論の構想をねつておられたのであるが、鎌倉の人々は知る由もなく、自分勝手な理由をつけておつたのである。宿屋左衛門尉光則も、自分が寺社の事務をつかさどる奉行であつた関係上、小町の辻に聖人が現われると同時にその囁きは耳にしておつたのである。しかし念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊の格言をとなえるからと



いってもこれを取りしまる術もなく、又とりしまる気にもなれなかった。法然上人ですら、阿弥陀仏の外は如何なる仏も神も絶対におがんではいけなさと大変に強くいつておる。礼拝雑行といつて、阿弥陀仏以外のものを拜むと地獄に行くといつておる。日蓮の四箇の格言の取締りを鎌倉の僧侶が宿屋左衛門尉にたのんでも、取締りをする事が出来ない要素を、仏教自身がつておったのである。

だが、三年前に小町の辻から急に聖人の姿が消えた時、いろいろな世間の風評もあつたので、聖人の身边をさぐつてみたのである。すると世評とは反対に、聖人の身边には仲々有力な信者が出来て、教団は除々にあなどれぬ力をもちはじめたのであつた。聖人の信者の主なる者の名をあげると、四条頼基、進士吉春、工藤義隆、荏原義宗、池上宗仲、波木井実長等々鎌倉武士の範たるべき人々が南無妙法蓮華経と力強く唱えているのだつた。七年前の鎌倉には南無妙法蓮華経と唱える人は聖人たった一人であつたことを忘れてはならない。また聖人のおそばには、日昭、日明、日興と三人の御弟子達が給仕奉公をしておるのであつた。

文応元年の聖人はもはや鎌倉の街頭に四箇の格言を叫ぶ一快僧ではなく、弟子もあれば信者檀越のある、堂々たる鎌倉新仏教の一勢力を代表する僧侶であつた。

宿屋左衛門尉光則とてもこの辺の消息を知つておつたので、聖人を扱ふことは丁重であつた。

(筆者注、宿屋左衛門は聖人の滝ノ口法難後改宗して自らの屋敷を寺とした。現在の光則寺がそ

れである）聖人は宿屋佐衛門尉を前にしてたずさえきたった立正安国論の要旨を説明された。「ここ数年來打続く、天変、地天、飢饉、疫病は如何なる原因によつて來たるものと考えられま  
すか、為政者としての御貴殿も種々苦慮されておることでございます。日蓮もこの原因を  
さぐるうと五度目の一切経閲読を駿州岩本の実相寺に二か年間こころみましたが、その因つて來た  
る原因をこの立正安国論に申し述べてございます。

災難の原因を一言にして申すならば、天下の人々悉く正しき法にそむいて、よこしまの教を信  
じ、万民すべてが誇法の罪をおかすことによるのでございます。正法を信ぜざれば、ここ数年來  
の災難は益々やまず、邪教を禁ぜざれば、ここ数年來の災難をもしのぐ驚天動地の出來事が起る  
でありましょう。速かに邪教たる禪宗、誇法たる念仏をとどめ給え、この重大なる提議を用いず  
して日を過せば、天下の兵馬の権を握られておる北条一門には同志討ちの騒乱が起り、ひいては  
この日本国がよその国から攻められるという、開闢以來未曾有の出來事が起るでしょう。幾多の  
経文を例証してこれを申し述べております。日蓮が嚴罰をかえりみず、敢えて不敬をも辞せずし  
てこのことを申すのは、ただ君のためであり国のためであり、神のため仏のためにこれを申すの  
で、一言も邪心はないのでございます。貴公は執権職北条時頼殿の近臣でもあり、寺社の事務を  
司る御奉行であります。何卒、この立正安国論を殿中に披露して、執権職北条時頼殿のお耳に達  
するよう御努力をお願いいたします」

文応元年（六百九十余年前）七月十六日、宿屋佐衛門尉の屋敷における聖人の立正安国論上奏の言葉である。

